研究発表題目：『南あわじ市沼島方言における複合語のアクセント』

所属：東京大学大学院 人文社会系研究科 言語学専門分野 博士課程 1 年　中澤 光平

要旨

本発表では，南あわじ市沼島（ぬしま）方言のアクセントについて，発表者による現地調査におけるデータをもとに記述し，そのアクセント単位について考察する。

沼島方言は以下の特徴を持つ，現代京都方言と同様のアクセント体系であると考える。

・下げ核/ ˋ /を有する（以下，下げ核を単に「核」と呼ぶ）

・高起式/ ‾ /と低起式/ _ /の 2 式を有する

高起式は核が無い限り文節の最初から高く続く。低起式の場合，核があればその直前で，なければ文節末で上昇する（この無核の文節末の上昇は，次に高起式の語が続く場合には消失する）。このように，低起式の語は 1〜4 拍では常に 1 拍だけ高い形（一拍卓立）を取る。

これに対して，5 拍以上の複合名詞では，「運任せ」ウン[マカ]セ，「鯉幟」コイ[ノボ]リ，「立ち話」タチ[バナ]シ，「苺畑」イチゴ[バタ]ケ，「お門違い」オカド[チガ]イ「玉葱畑」タマネギ[バタ]ケ，「糸鋸」イト[ノコ]ギリ，「さやえんどう」サヤ[エン]ドウ，「食べ放題」タベ[ホーダ]イ，「たらこ唇」タラコ[クチビ]ル，「イソップ物語」イソップ[モノガタ]リのように，2 拍以上高い音調型が見られる（ [は上昇，] は下降を表す）。この上昇は複合名詞の前部要素と後部要素の間で生じるもので，語構成を示す機能がある。従って，「春祭り」ハル[マツ]リは「兎狩り」ウサギ[ガ]リと同じく低起式で 4 拍目に核がある型と解釈される。

一方，前部要素が 1 拍の場合は一拍卓立となり，上昇による複合語の形態素境界の標示は前部要素が 2 拍以上あることが条件と推測される。また，「あり合わせ」アリアワ[セ，「繰り返し」クリカエ[シ，「高望み」タカノゾ[ミ，「隠し事」カクシゴ[ト，「蚯蚓腫れ」ミミズバ[レ，「取り扱い」トリアツカ[イのように，無核の場合は境界での上昇が生じないことから，この上昇が核に連動するものであり，（低起）式が持っている属性ではないことが分かる。低起式における複合名詞の形態素境界での上昇は，高知市方言や徳島市方言でも見られる（中井 1997，中井ほか 1999）が，これらの方言では低起式が早上がり（高知○[○○…，徳島○○[○…と核の有無，位置に関わらず早く上昇する。語構成に応じて上昇位置が後ろにずれることがあるが，高知市では語構成に関係なく○[○…となることが多い）であり，無核の場合でも形態素境界での上昇が生じることから（低起）式が持つ特徴と認められるため，沼島方言の上昇とは異なる。一方，核と連動した形で 2 単位形が現れやすくなるという現象は京都市の複合動詞にも見られ（中井 2001: 26），通方言的な分析の必要性があることが分かる。

参考文献

中井幸比古 編（1997）『高知市アクセント小辞典』神戸：神戸市外国語大学.

中井幸比古ほか 編（1999）『徳島市方言アクセント小辞典』神戸：神戸市外国語大学.

中井幸比古 編（2001）『京都市方言アクセント小辞典』神戸：神戸市外国語大学.